

澄円『浄土十勝論』序文・跋文の執筆者について

大 橋 雄 人

一、はじめに

澄円（浄円もしくは智演ともいう）は室町期の浄土宗の学僧である。当時隆盛であった禅宗が浄土宗を庸宗・寓宗であり、その教義を小乗であるとしていたことに対して、澄円は浄土の教義が廬山の正流を汲むものであることを主張し、また大乘教である所以を明らかにしたといわれる。また、入元して廬山において優曇普度に教えを受け、帰朝の後は堺に旭蓮社を開創している。その教学は諸宗兼学・融合的な思想であったとされており、浄土宗内においては特徴的な思想であるとみられるが、従来の研究においてあまり着目されていない。さらに時期的には浄土宗第七祖・聖岡の先駆をなすのものであって大変近い時期に活躍しており、浄土宗史上においても注目される人物である。

本研究においては、澄円の教学研究を進展させるための基礎整理の一環として、主たる著作である『浄土十勝箋節論』（以下『十勝論』）『同輔助義』の序文および跋文の執筆者の立場について言及し、『十勝論』の周囲への伝承、また執筆者と澄円との関係について検討を行いたい。

二、澄円に関する先行研究

澄円についての研究は多くはなく、また専攻とする研究者もほとんどみられない。そのような研究状況のなか、三田全信『浄土宗史の諸研究』（光念寺、一九五九／改訂増補版、山喜房仏書林、一九八〇）には「十四、旭蓮社澄円について」として、聖岡が関東にあり、澄円が関西にあって、ともに扶宗の説を述べた双壁として言及している。そのなかで三田氏は、出生と家系、修学殊に鎮西義相伝、渡元とその年代、旭蓮社の開創、皇室との関係、晩年について澄円の諸伝記の記述を対照しながら述べ、また教学については禅宗からの批難に対する主張を夢窓疎石『夢中問答』、澄円

『夢中松風論』、疎石『谷響集』などを通じてうかがっている。さらに澄円の著作と帰朝の際に将来した品目について整理し、また澄円の伝記史料についても一覧としてまとめており、澄円に関して現在でももっともまとまった研究として評価されるものである。

また服部英淳『浄土教思想論』第六章「中世における中国仏教の受容」には澄円の入元について触れており、その生涯を略述している¹。

さらに山田智旭氏に「澄円菩薩の行実と思想」、「澄円菩薩著『浄土十勝論』について」、「澄円菩薩著『浄土十勝論』について一首巻にみられる論主の人となり」、「『浄土十勝論』よりみたる澄円菩薩の思想信仰」（『仏教論叢』三二～三五、一九八八～一九九一）などの一連の論稿がある。山田氏は「澄円菩薩の行実と思想」において、三田氏が旭蓮社第二世・澄厳が記した澄円の伝記記事のなかで、澄円の出生、入元、帰朝、旭蓮社開創、寂年などの年代については信を置き難いとしたことに対し、澄厳筆・澄円伝記の各記事の年月日について再考している。「澄円菩薩著『浄土十勝論』について」においては、的門の「浄土十勝論凡例」の記述をもとに『十勝論』の書誌について若干の整理を行い、また序文の記述から『十勝論』の作成意図を紹介し、その構成についてもまとめている。「澄円菩薩著『浄土十勝論』について一首巻にみられる論主の人となり」においては、序文・跋文の文言から澄円の人柄についてうかがっている。「『浄土十勝論』よりみたる澄円菩薩の思想信仰」では、序文・跋文の文言から『十勝論』に対する評価を整理し、またそこから澄円の思想を読み取り、『十勝論』第一・三学無分勝の記述から思想信仰の特徴をうかがっている。

また平成二一年度大正大学総合佛教研究所所内研究発表会発表要旨として、吉水岳彦「旭蓮社澄円と了誉聖岡—浄土宗の相承説について—」（『綜佛年報』三二、二〇一〇）の研究発表報告があり、澄円『十勝論』における浄土宗相承説の考察と聖岡の浄土宗相承説との比較検討を行っている。

このほか、澄円についての直接的な研究ではないが関連する論稿としては、真柄和人「『夢中松風論』に引用される法然上人の法語（一）」（『仏教論叢』三三、一九八九）、「『夢中松風論』に引用される法然上人の法語—〈現世ヲ過ヘキ様ハ〉—」（『仏教論叢』三四、一九九〇）などもみられる。

以上、先行研究を概観しても、澄円の伝記の記述からその生涯や時代背景などについては研究されているが、著作の内容からその思想・教学に言

及した研究は進んでいないのが現状である。

三、澄円の著作について

澄円の著作については、『泉州廬山旭蓮社澄円菩薩略伝』、澄巖『泉州堺旭蓮社澄円菩薩略伝』などの諸伝記、『十勝論』首巻「著述書目」、『十勝論』重澄跋文などに散見される。いま『十勝論』首巻に「論主著述書目」として整理されているものを挙げれば以下の通りである²。

- ・『驚覚論』
- ・『浄土五祖弁』
- ・『浄土五祖弁末書』
- ・『夢中松風論』十巻
- ・『浄土諸祖系図』
- ・『浄土諸祖系図光彩論』
- ・『二論問答集』
- ・『二道対弁論』
- ・『蜀道論』
- ・『愚問賢答集』
- ・『二愚一賢集』
- ・『琢磨鈔』
- ・『釈門息諍論』
- ・『知恩報恩集』
- ・『親近知識集』
- ・『破邪顕正論』
- ・『能断金剛集』
- ・『呂律集』
- ・『浄土諸流縁起集』
- ・『浄土十勝論』一四巻、首巻一卷
- ・『浄土十勝論輔助義』四巻

以上の著作は『輔助義』を除いて、源重澄の『十勝論』跋文に記されている書名と重複する。

また三田氏は作者未詳の『泉州廬山旭蓮社澄円菩薩略伝』（三田氏は『作者未詳本』と称す）に上記の著作のほか

- ・『浄土十勝論輔助義』四巻
- ・『初心行護抄』
- ・『接物語録』
- ・『順歴紀行』
- ・『自身感應靈驗伝』
- ・『詩歌文集』

があることを指摘している³。このほか、真偽について問題とされている著作ではあるが『獅子伏象論』（中末）が挙げられる。

これら澄円の著作のうち現存するものは、『夢中松風論』『浄土十勝論』『同輔助義』のみであり、成立順序について詳細は定かではない。しかしながら三田氏が重澄跋文と『作者未詳本』を比較して、『作者未詳本』に

のみみられる著作は重澄が跋文を執筆した貞和二年（一三四六）以降に成立したものであろうとの見解を示している。三田氏の指摘によって『十勝論』を中心として、澄円の著作の成立をそれぞれ『十勝論』の前後に分類することは可能であるが、それ以上の詳細な成立順序は不明である。そのため澄円の思想史的研究は著作の成立時期が記された新出資料などが発見されないかぎり今後の展開は難しいものとおもわれる。

四、『浄土十勝論』の成立および書誌的整理

澄円の著作中、『十勝論』はもっとも大部の著作であり、現在みられる嘉永五年（一八四八）の刊本は『箋節論』首巻一卷、本文一四巻、『輔助義』四巻の計一九巻の構成となっている。

『十勝論』の成立・執筆意図については、澄円が自序において、

粵に持名居士と云う人有り。身、囂塵に交わると雖も、心、常に浄域に棲む。乃ち相い命じ談話す。遂に弘願の宗旨を詳勘して、以て致迷の学者を激励せよと請う。已むを獲ず傷手の誠を犯して、一大蔵經を徧覽して余教の絶離する所、他氏の談ぜざる所を摘みて浄土十勝を立つ。⁴

とあり、持名居士の要請によって執筆したものであることが述べられている。またその成立時期は澄円自序の最後に

正中閏逢困敦黄鐘莫生十五葉⁵

とあるように正中元年（一三二四）十一月一五日が挙げられる。しかし『十勝論』巻中・乾下の巻末に比叡山本院東谷に住する承遍に関する記述のなかに、文保元年（一三一七）には『十勝論』を師の承遍に講義した旨の記述がみられるので、その時期には執筆が完了していたものと考えられる。

また跋文のなかに『十勝論』の伝承過程がうかがわれる記述が見受けられ、尊海の跋文には、

抑、高卑の緇白、力を出だして而も共に此の書を広む。肆こに予、自ら二部を写して四輩に授与す。此れ即ち師の道をして普く天下に流行せしめんが為なり。（『綜佛年報』三三、一〇二頁）

とあり、尊海が『十勝論』を二部書写して出家・在家の信者等に与えた旨

が述べられている。また隆珍の跋文には、

或る時示して曰く「此の典、広通流行せよ」と。此の言を謹みて許諾す。師久しからず大寂に帰す。今其の後に続きて、同志を率いて三本を写して、以て師の志を成ず。(『綜佛年報』三三、一〇四頁)

とあって、同志とともに三部を書写したことがうかがわれる。

また即成の跋文には、

然るに貞和巳丑の歳、清水寺回禄の時、此の『論』兩本、之れを失す。謂わゆる一本は一兩軸、忽せに煨燼と為る。一軸は速かに塵土に塗れ竟ぬ。一本は紛失して永く見えず。小子、苦に其の文を求めんと雖も、之れを得ること能わず。適一二を得れども、猶し未だ余卷を得ず。然るに同杞の林鐘の天に其の全部を獲たり。仍て同志を率して之れを写し、晨昏、之れを握玩して、以て心を洗い慮りを安じ竟ぬ。又た剩え跋文を綴りて、卷末に附するのみ。(『綜佛年報』三五に掲載予定)

と記されており、貞和五年(一三四九)以前、清水寺に『十勝論』が二部所蔵されていたが、貞和五年二月の清水寺火災に際して、所蔵されていたうちの一部は三卷中二卷が灰となり一巻が土に埋もれ、もう一部はそれ以前から紛失して所在が知れないとある。即成は『十勝論』を求めていたが得ることができず、たまたま一、二卷を得ることができても、残りを得ることはできていなかった。しかし、幸いなことに貞和五年六月、『十勝論』全卷を得ることができ、同志数人と書写して、自身は跋文を卷末に付したと記している。

さらに舜秀の跋文には、

抑舜秀図らずも西郊清凉寺に於て、嘗て此の論を獲て、指を染めて書意を看得し、沈思して点檢子細にして、以て知音に示すに、信敬を致さずと云うこと莫し。之れを八極に行かまく欲して謹んで跋を為るや。(『綜佛年報』三五に掲載予定)

とあり、舜秀は清凉寺において『十勝論』を得たことが記されており、清凉寺にも『十勝論』が蔵されていたことがうかがわれる。

写本に関しては以上のような伝承がみられるが、現在『十勝論』は『仏書解説大辞典』や目録などにみられるかぎり、

- ・寛文三年(一六六三)刊本⁶
- ・嘉永五年(一八五二)刊本⁷

・文久四年（一八六四）刊本⁸

の三種類の刊本が確認できる。その書誌については、寛文版の末尾に燈誉の弟子である徳蓮社智公実誉の奥書によってうかがうことができるが、寛文版がいずれの写本をもとにして翻刻されたものかは記されていない。しかしながら嘉永版には的門「校訂浄土十勝論凡例」が付されており、その記述から以下のような点が指摘できる。

- ・澄円没後、約三四〇年刊本は無かった。
- ・寛文三年に初めて刊行されたが、天明の火災により版木が焼失した。
- ・そのため、法洲が隆円・僧寿と協力して八冊翻刻したが、相次いで遷化したので、法洲の弟子である法道、および大雲院の的門にその事業を引き継がせて完成した。
- ・嘉永版翻刻の際、寛文版（旧本）と旭蓮社第一四世燈誉上人謄写本（古本）を比較参照して校訂を施している。
- ・原本は上・中・下三巻、上中巻が各乾・坤、下巻が本・末の計六冊であるが、燈誉謄写本には六冊にはまとめ難かったので一〇巻としたと付言があり、寛文版は一四巻に調えられた。
- ・燈誉謄写本には『補助義』が無かったので寛文版によって訂正を施した。
- ・嘉永版翻刻に際して、澄円の伝記に齟齬があるため、『鎮流祖伝』の伝記を抄出し、寛文版『箋節論』のはじめに録する序文三篇と各巻首に載する章目、および『箋節論』末に付されていた跋文一九章などをまとめて「首巻」を作成し、首巻一卷、『箋節論』一四巻、『補助義』四巻の計一九巻の構成とした。

以上の点から嘉永版の特徴は、寛文版と燈誉謄写本によって校訂されたものであって、その校訂も冠註にその作業箇所がうかがうことができ、現在でも諸本の相違を確認することができる刊本であるといえる⁹。

また文久版には首巻に文久四年（一八六四）一月付の教音による「澄円菩薩賛」、『補助義』の末尾に「重刊浄土十勝論助梓名署」と題した元治元年（一八六四）三月付の的門による奥書が追加されている¹⁰。したがって嘉永版を重刊したものが文久版であるとみられ、文久版と嘉永版の本文は同じものであると考えられる¹¹。

五、序文および跋文執筆者について

さて、先にも少し触れたように『十勝論』には三篇の序文と一九章の跋文が付されている。本来であれば跋文は寛文版でそうであったように本編の終わりに付されているものであるが、嘉永版において首巻にまとめられた。ここでは序文・跋文の執筆者の素性や人間関係について確認してみたい。

まず序文三篇の執筆者であるが、俊覚律師、持名居士、澄円の三人である。持名居士は『十勝論』執筆の要請者、澄円は著者本人である。俊覚律師については序文から澄円との関係をうかがえる記述はみられなかったが、少なくとも持名居士と澄円が『十勝論』の要請者と執筆者の関係であることは知っているものである。また、これら序文が書かれた時期であるが、俊覚・持名居士の序文には年号などの記述が無く、唯一、澄円の自序に「正中」の年号が見えるのみである¹²。俊覚、持名居士、澄円のそれぞれの序文は、その執筆前後は定かではないが、いずれもさほど時期は大きく異なるものではないと推測する。

次に跋文一九章の執筆者であるが、首巻に掲載されている順番に挙げていくと経印・承豪、楽西、尊海、隆珍、乗空、吽慶、実秀、慧旭、良旭、長厳、快実、重澄、寂然、妙快、実信、即成、隆秀、一秀、隆珍、舜秀であり、表題に「跋文十九章¹³」と掲げながら、実際には二〇章ある。さらに初めの一章は経印と承豪という二人の人物による共著であり、また「隆珍」という人物が二回みられる。

これらの跋文の執筆時期であるが、跋文の末尾に年月日が記されているものと記されていないものがあり、日付のある跋文としては、経印・承豪、慧旭、快実、重澄、寂然、妙快、実信の七篇である。このなかで最も古い日付の跋文は経印・承豪の元応二年（一三二〇）一月一五日¹⁴、最も下る日付の跋文は実信の貞和五年（一三四九）四月八日である¹⁵。

つまりこの『十勝論』は成立後、実に三〇～四〇年に渡って手を替えながら跋文が書き続けられたものであることがわかる。なお澄円は伝記によって没年や晩年が異なるが、建徳二年／応安四年（一三七一）頃に入寂もしくは行方不明となっているので、跋文はいずれも存命中に書かれたもののようである。また日付がわかる中では経印・承豪の跋文が、唯一澄円

が自序を書く以前に書かれたものである。

続いて、これら執筆者の人間関係がうかがわれる記述をみていきたい。
まず楽西の跋文には、

一日、余が友、持名居士、此の典を携えて以て予に示して曰く「此れは乃ち浄円大徳、弟子が致請に酬えて製述さるるの書なり―後略―」。
（『綜佛年報』三三、一〇〇頁）

とある。これによると、楽西と持名居士が友人関係にあり、持名居士が楽西に『十勝論』を伝えたことがわかる。楽西が持名居士から『十勝論』を伝えられたということは、言い換えれば、楽西は『十勝論』の跋文を書いているものの、おそらく澄円と直接の面識は無いであろうことが読み取れる。

次に隆珍の跋文には、

抑尊海大徳は、是れ俗に在りては連枝なり。家を出ては門師となり、顕密の達士、法門の領袖為りと雖も、得道の径路を十万億土の西に定め、解脱して要行を六字尊号の法に勤む。然るに持名討論の余暇を以て『十勝論』を写して、欣然として跋を作らる。

或る時示して曰く「此の典、広通流行せよ」と。此の言を謹みて許諾す。師久しからず大寂に帰す。今其の後に続きて、同志を率いて三本を写して、以て師の志を成ず。（『綜佛年報』三三、一〇四頁）

とある。「連枝」とは兄弟を意味する語であるから、これによって尊海と隆珍がおそらくは兄弟であることがうかがわれ、出家してからは師弟関係にあったようである。したがって尊海と隆珍は同門であることから同じ宗旨に属するものであったと考えられる。また尊海から「此の典、広通流行せよ」と命じられていることから、隆珍も楽西と同様に澄円と面識は無いと推測される。さらに「師久しからず大寂に帰す」とあることから、尊海は隆珍の跋文が書かれる以前に示寂していることがわかるが、跋文の末に明確な日付をみないのでその時期については定かではない¹⁶。

また慧旭の跋文に

爰に緇白の二弟子有り。覚律尊者は僧林の鸞鳳なり。持名居士は儒家の達士なり。各序を為りて文の首に冠らしむ。―中略―、抑論主昇蓮社大徳和尚は余が法友なり。（『綜佛年報』三四、九六頁）

とあり、俊覚と持名居士は澄円の弟子である旨が記され、さらに澄円と慧

旭は法友であると述べられている。さらに良旭の跋文には

九品の彼岸に登るの龍津を尋ぬるに、時に当りて法友俊覚律師、此の論を携えて、以て余に与う。(『綜佛年報』三四、九八頁)

と記され、俊覚と良旭が法友であり、俊覚が良旭に『十勝論』を伝えたとしている。すなわち良旭も澄円と直接の面識があるわけではないことがうかがわれる。

次に重澄の跋文には、

抑夫の玄奘三蔵自翻の般若に於て御製の序を請い、咸耀書記所撰の義海を携て惟心の題跋を求めんの例に準じて、論主自ら十勝三軸を送りて以て跋文を請う。只貴命を重することを知りて短筆を顧みず、敬て其の末に書して以て之に帰す。(『綜佛年報』三四、一〇二頁)

とあり、重澄は跋文執筆者のなかではめずらしいことに直接澄円から跋文の執筆を依頼されたことがうかがわれる。

重澄とは逆に実信の跋文には、

然るに学者多く明日に恥慚す。今小子法城を護らんが為に、不請の友と作りて、高く跋文を製して真乗を恢闡し、永代に程^{はか}りて作し、長冥に炬を示す。(『綜佛年報』三四、一〇六頁)

とあり、実信は自ら跋文を製したことが記されている。

以上のように、序文・跋文執筆者は互いに面識がある場合があり、その交流の過程で『十勝論』が弘まり跋文を書くに至ったという流れが見受けられる。

次にそれぞれの執筆者の立場についてみていきたい。各序跋文の末尾に記されている執筆者と肩書き、関連事跡を整理すると以下の表のようになる。

No.	肩書き	人名	関連事蹟名	執筆日
序一	南山門人	俊覚		
序二	素衣弟子	持名居士		
序三	伝浄土教菩薩大乘戒比丘	澄円		正中元年(一三四二) 十一月五日
跋一	権少僧都法眼和尚	承豪	台嶺本院東谷	元応二年(一三二〇) 一月一日
跋一	法印大和尚	経印	台嶺本院東谷	元応二年(一三二〇) 一月一日

跋二	厭欣居士	楽西		
跋三	沙門	尊海		
跋四	欣西庵住持嗣祖苾芻	隆珍	欣西庵	
跋五	遊方仏子	乗空		
跋六	伝遮那大教兼天台円宗	昨慶		
跋七	三部大阿闍梨	実秀	摂州神呪寺	
跋八	東山隠士	慧旭		応永二年(一三四三)
跋九	持名尊修之行人	良旭		
跋一〇	三部大阿闍梨権大僧都	長巖		
跋一一	沙門	快実		康永四年(一三四五) 一月八日
跋一二	朝議即	重澄		貞和二年(一三四六) 三月一五日
跋一三	金剛仏子	寂然		貞和三年(一三四七) 二月一五日
跋一四	沙門	妙快		貞和四年(一三四八) 八月三日
跋一五	三部大阿闍梨	実信		貞和五年(一三四九) 四月八日
跋一六	一乗行者沙門	即成		
跋一七	隠士	隆秀		
跋一八	罪人、死刑	一秀	洛陽河東福成寺	
跋一九	金剛仏子	隆珍	西郊 法輪寺	
跋二〇		舜秀	西郊 清涼寺	

俊覚の冠する「南山門人」の「南山」とは高野山の異名であり¹⁷、これから真言宗に属する、または高野山に住する僧であることがわかる。また承豪・経印の跋文中にみられる「台嶺本院東谷」ということから、両名は比叡山に住していたことがうかがえる。

このように肩書き、関連事蹟からうかがえる宗派、また先にみた交流関係などから、序文・跋文執筆者の宗派的な所属の分類を試みると以下のようになる。

- ・天台……………承豪、経印、尊海、隆珍、快実、妙快、即成
- ・真言……………俊覚、昨慶、実秀、長巖、実信

- ・在家居士等…持名居士、樂西、重澄
- ・その他……乗空、慧旭、良旭、寂然、隆秀、一秀、舜秀

これらの分類をみると、比較的、天台宗に属する人師が多いように見受けられる。伝記に依れば、澄円は比叡山の承遍・観豪から天台学を学んでおり、比叡山の学侶とは交渉が多かったであろうことは推察される¹⁸。

また「その他」に分類される人師も含め、『十勝論』の序文・跋文の執筆者には法然の門下の流れを汲む者はほとんどみられないように見受けられる。試みに系譜資料等の調査を行ったが、いずれも執筆者の名前は管見のかぎり見受けられなかった。尊海について「得道の径路を十万億土の西に定め、解脱して要行を六字尊号の法に勤む」と隆珍の跋文にいわれるように、得道を西方浄土に求めた者もみられるが、これはおそらく阿弥陀仏に帰依し称名念仏を修するようにはなったが、法然門下の流れを汲む人師などに弟子入りして念仏門に励むという形ではなかったようである。

なお、執筆者すべてに当てはまるわけではないが、その関連事蹟を鑑みると関西において活動していた人師が多いようであり、序文・跋文執筆者の分布が『十勝論』の伝承地域であるとする、『十勝論』はおもに関西方面で弘まっていたと推察される。

六、まとめ

以上、『十勝論』の書誌的整理を行いつつ、序文および跋文の執筆者の立場について言及し、『十勝論』の周囲への伝承、また執筆者と澄円との関係について検討を試みた。

まず序文・跋文執筆者の互いの交流関係と澄円との関係であるが、序文執筆者の俊覚と持名居士は澄円の弟子であり、澄円との直接の交流があった。しかし跋文執筆者については、今回みてきたように澄円と直接の面識がある者もあり、俊覚や持名居士、また他の跋文執筆者から『十勝論』を伝えられた者もあったことから、跋文が澄円存命中に執筆されたものではあるが、執筆者全員が澄円と面識があるわけではないことがうかがわれた。

次に『十勝論』序文・跋文執筆者の宗派についてであるが、その肩書きから天台・真言等の諸宗の学者、在家の居士が多く、法然門流の流れを汲む者の跋文はみられなかった。おそらく法然門流にも『十勝論』は流布し

ていたものと推察されるが、跋文の執筆者の肩書きをみるかぎりには、諸宗の学者や在俗の居士にも広く評価を受けていたことがうかがわれる。換言すれば、当然のことながら鎌倉時代に開宗された禅宗・日蓮宗などの人師に評価はされていない状況がみられる。

また序文・跋文執筆者の住处から、『十勝論』は主に関西方面に流布していたようであることがうかがわれた。この点については、聖岡の著作など『十勝論』成立後、後世に著わされた典籍にその引用や影響がみられるか否かを検討する必要があると考えられ、今後、『十勝論』の後世への影響を考えるうえでの研究課題としたい。

(大正大学総合仏教研究所研究員)

- ¹ 服部英淳『浄土教思想論』(山喜房仏書林、一九七四)二〇八～二〇九、二二八～二二九頁。
- ² 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究(1)」(『綜佛年報』三二、二〇一〇)一四一～一四二頁。
- ³ 三田全信『改訂増補 浄土宗史の諸研究』(山喜房仏書林、一九八〇)三八五頁。
- ⁴ 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究(1)」(『綜佛年報』三二、二〇一〇)一四五頁。
- ⁵ 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究(1)」(『綜佛年報』三二、二〇一〇)一四六頁。
- ⁶ 『仏書解説大辞典』六、九〇頁b。
- ⁷ 『仏書解説大辞典』六、九〇頁b。佛教大学仏教文化研究所編『佛教大学図書館所蔵和漢書中 浄土宗学関係書籍目録稿』(佛教大学仏教文化研究所、一九八〇)六六頁上。
- ⁸ 佛教大学仏教文化研究所編『佛教大学図書館所蔵和漢書中 浄土宗学関係書籍目録稿』(佛教大学仏教文化研究所、一九八〇)六六頁上。
- ⁹ 室町期諸宗兼学仏教研究会においても嘉永版を底本として研究を進めている(「室町期における諸宗兼学仏教の研究(1)」九八頁)。
- ¹⁰ 文久から元治へは二月二〇日に改元が行われている。
- ¹¹ 現在、著者が確認しているのは、研究会にてテキストとして用いている寛文版と文久版であり、今後、嘉永版の所在および内容について確認を行いたい。
- ¹² 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究(1)」(『綜佛年報』三二、二〇一〇)一四六頁。
- ¹³ 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究(2)」(『綜佛年報』

三三、二〇一一）九九頁。

¹⁴ 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究（二）」（『綜佛年報』三三、二〇一一）九九頁。

¹⁵ 室町期諸宗兼学仏教研究会「室町期における諸宗兼学仏教の研究（四）」（『綜佛年報』三五、二〇一三）一〇六頁。

¹⁶ 人名辞典等によると鎌倉中・後期の天台宗の僧として「尊海」という名がみられ、それによると生存年が建長五年（一二五三）～正慶元年／元弘二年（一三三二）とあり、時代的にも妥当性はうかがわれる（『日本仏教人名辞典』四六四頁右）。

¹⁷ 『密教大辞典』縮刷版、一七〇四頁中、「南山（一）」。

¹⁸ 心阿『浄土鎮流祖伝』（『浄全』一七、四五三頁上）。

